

テオドロ・A・アゴンシリョの『大衆の反乱』を読む： フィリピン革命史研究の原点として

永野 善子

はじめに

1946年にフィリピンは日本占領期（1942～45年）を経て、アメリカから政治的に独立した。独立後75年を経過した今日でも、フィリピン革命史（1896～1902）は、フィリピン歴史学界において最も重要なテーマである。その理由は、フィリピン革命がフィリピン近現代史の出発点として位置づけられているためであろう。フィリピンは1896年に勃発した対スペイン独立革命により、いったんはスペインから独立を勝ち得たものの、米西戦争とのからみでアメリカが介入した結果、1899年にフィリピン・アメリカ戦争が開始され、新たにアメリカの植民地支配下に置かれるという結末を生んだ。このため、フィリピン革命は、フィリピン史のなかでは挫折した独立革命としての歴史的意味がある¹。

独立後のフィリピンでは、冷戦時代のナショナリズムや社会主義旋風が吹き荒れ、フィリピン国内の反体制運動が高揚するなかで、独立国家建設における国民表象としてフィリピン革命が重要な文化的意味をもつことになった。そのなかで、革命を遂行する主体として、一般民衆に焦点をあててフィリピン革命史像を再構築する流れを生み出すうえで大きな役割を担った歴史家が、テオドロ・A・アゴンシリョである。アゴンシリョは、1956年に公刊された著書『大衆の反乱：ボニファシオとカティプーナンの物語』（Agoncillo 1956/1996）によって、アンドレス・ボニファシオを中心として、秘密結社カティプーナによる反スペイン蜂起から革命組織自体によるボニファシオ粛清事件までの展開を克明に追跡し、フィリピン革命初期におけるマニラ都市労働者層の役割を明らかにしたからである²。

とくに1960年代以降には、「未完の革命」としてフィリピン革命を位置づける方向で大筋の議論が進められた。この「未完の革命」論のなかでは、革命政府を率いたものの、アメリカの軍事的介入に屈服したエリート層は、「革命の裏切り者」であり、「革命を持続する民衆」の「敵」として理解されることになる。こうして、反植民地抵抗運動としての民衆史に軸足を置いた革命史研究がレナト・コンスタンティーノ（Constantino 1975; Constantino 1978）³やレイナルド・C・イレート（Ileto 1979）らのフィリピン人研究者によって展開された。この結果、それまでフィリピン革命の英雄もしくは立役者とみなされてきたリサルなど有産知識階層（イルストラード）やアギナルドなどの地方有力者層（プリンシパリア）ではなく、都市労働者層や農民、さらにはコロルムと呼ばれる土着宗教集団など、多くの場合、「大衆」として語られる一般住民がフィリピン革命にどのように関与していたのかに関心が向けられたのである。

ところが、1996～98年にフィリピン革命百周年記念の行事が企画されるなかで、フィリピン革命史研究をめぐる、アメリカとフィリピンの歴史学者の間で激論が交わされた（永野 2000、永野 2016：第2章）。さらに、フィリピン人研究者の間でも過去10年余りの社会変化を反映して、従来の「未完の革命」論に代わる新たなパラダイムが模索されるようになり、ともすれば「未完の革命」論では軽視されてきたエリート層の特徴とその役割に再度関心が向けられるようになった。他方、アゴンシリョの代表作『大衆の反乱』やその他の著作についての再評価も進められ、従来の民衆史観の再検討もおこなわれている⁴。

本小稿は、こうした近年における『大衆の反乱』をめぐる議論を踏まえて、フィリピン革命史研究におけるその意義について考察する試みである。以下、第1節でアゴンシリョの略歴を紹介し、第2節で

『大衆の反乱』をめぐる論争を振り返る。ついで第3節で『大衆の反乱』の歴史叙述の特徴を明らかにすることにしたい。

1 アゴンシリョの略歴

テオドロ・A・アゴンシリョは、1912年11月9日にルソン島マニラ近郊諸州のひとつであるバタンガス州レメリー町で生まれた。彼の父親ペドロ・アゴンシリョはフィリピン・アメリカ戦争（1899～1902）の時代に革命軍として戦い、1902年にアメリカ軍に降伏した最後の軍人のひとりとして知られている。また大叔父のフェリペ・アゴンシリョは、1898年のパリ講和条約交渉にあたりフィリピン革命政府の代表を務めた人物であり、その妻マルセア・アゴンシリョは、最初のフィリピン国旗を縫製した3人の女性のひとりだった。なお、革命政府初代大統領のエミリオ・アギナルドは初婚の妻と死別したあとフェリペ・アゴンシリョの姪と再婚したため、テオドロ・アゴンシリョはアギナルドとも遠縁の関係にあったことになる。こうしたことから、テオドロ・アゴンシリョは対スペイン革命と対アメリカ戦争を戦った家族や親族に囲まれながら、幼少期を過ごしたことが窺われる（“Agoncillo, Teodoro A. (1912-1985)” 1993: 131; Totanes 2012: 114; Ocampo 1995: 81, 172; “Felipe F. Agoncillo” 1989: 26-30; “Marcela M. Agoncillo” 1989: 30-34）。

アゴンシリョはすでに幼稚園でスペイン語を習い、さらにアメリカ人が設立した公立学校で英語を習得しながらも、リサールの小説の影響を受け、高校を卒業するころまでにはタガログ語で詩を書くようになっていた。1930年に国立フィリピン大学に入学したときは英語専攻を希望していたが、当時の歴史学科の教授レンアドロ・H・フェルナンデス⁵の影響を受けて、歴史に関心を向けるようになった。このため1934年に文学士（哲学）を取得したあとに、大学院修士課程（歴史学）に進み、翌年に修士号を取得した（Totanes 2012: 115-116）。

1941年になると、アゴンシリョはグレゴリオ・サイデとの共著で初めてタガログ語でのフィリピン史を出版した。しかし、その直後に日本軍が真珠湾攻撃と同時にフィリピン諸島へ侵攻したため、日本軍の摘発を恐れて活発な執筆活動を極力控えたという。アゴンシリョは自宅にこもり、フィリピン史にかかわる多くの書物や印刷物や資料を収集したほか、日本占領下の戦争の実態についての観察に努めた。そして、この時期の資料収集・資料の読み込や研究活動が、その後アゴンシリョが陸続と大作を刊行する原動力となった。こうして、独立直後の1947～48年にフィリピンでボニファシオとフィリピン革命初期をテーマとする政府主催の伝記コンテストが実施されたとき、アゴンシリョは友人からの勧めでコンテストに応募し、1948年に共和国賞を受賞することになる。そして大論争の末、ようやく1956年に出版された作品が『大衆の反乱』である（Totanes 2012: 116; Hila 2001: 57-59; Ocampo 1995: 20）。

アゴンシリョは、それまで国立国語研究所に勤務する傍ら、マニラのファーイースタン大学とマヌエル・L・ケソン大学でタガログ語と文学を教えていた。しかし、『大衆の反乱』の公刊後、1958年に母校の国立フィリピン大学歴史学科に教授として迎え入れられ、1977年に定年退官するまでに同大学歴史学科長、フィリピン歴史学ラファエル・パルマ講座教授、そして同大学特別荣誉教授を歴任した。また、この間に国家歴史協会の委員も務めている。さらに1980年には国家科学技術アカデミー委員に任命され、1985年1月14日に72歳で没後、「フィリピン共和国国家科学者」の称号を付与された。幾多の批判を受けながらも、アゴンシリョは、文字通り、独立後のフィリピン・ナショナリズムを体現した歴史家であったといえよう（“Agoncillo, Teodoro A. (1912-1985)” 1993: 131; “Teodoro Agoncillo” 1996: 6-7; Totanes 2012: 116）。

アゴンシリョは多くの著書を残しているが、主著とされるものは、『大衆の反乱』とその続編として刊行された『マロロス：共和国の危機』（Agoncillo 1960/1997）、そして日本占領期を扱った『運命の歳月：フィリピンにおける日本の冒険、1941～45年』（Agoncillo 1965）とこの大著を補完する意味をもち最後の著書となった『論証の責務：バルガス・ラウレルの対日協力』（Agoncillo 1984）である。その他、影響力を後世に残した作品として、フィリピンの多くの大学におけるフィリピン史の定番教科書となった

『フィリピン国民の歴史』(Agoncillo and Alfonso 1967; Agoncillo and Guerrero 1970)が挙げられよう。なお、邦訳に『フィリピン国民の歴史』の縮小版『フィリピン国民小史』(Agoncillo 1969)と『運命の歲月』(第1巻前半部)があり、日本のフィリピン研究においてもよく知られた歴史家である⁶。次節では、以上のアゴンシリョの略歴を念頭に置きながら、『大衆の反乱』をめぐる論争を振り返ることにしたい。

2 『大衆の反乱』をめぐる論争

前述のように、『大衆の反乱』は、ボニファシオを1896年革命の主導者として位置づけたことによって国内で大論争が巻き起り、1949年と1956年の2度にわたって出版が差し止められ、1956年によく公刊に漕ぎつけたという経緯がある。さらに同書は出版後もさまざまなかたちで批判を受けてきた。そうした『大衆の反乱』をめぐる刊行前後から1990年代までの論争を詳しく追跡した論考に、アントニオ・C・ヒラ著『テオドロ・アゴンシリョの歴史主義』の第3章「『反乱』と『マロロス』：大衆の仕事としての革命」がある(Hila 2001: Chap. 3)。

同論文によると、2度にわたって『大衆の反乱』の出版が差し止められた理由は、つぎのとおりであった。すなわち、アゴンシリョは1948年に伝記コンテストで共和国賞を受賞したことにより、ボニファシオの伝記として書かれた作品を出版する権利を得たものの、フクバラハップと呼ばれる急進的農民運動が当時ルソン島中部で大きな勢力として展開していたため、フィリピン革命結社カティブナーンに対するアゴンシリョの理解が上記の農民運動を鎮圧する側にあったフィリピン政府にとって不都合なものとみなされた⁷。また、ボニファシオの処刑に関与し、その後革命政府大統領を務めたエミリオ・アギナルドも、アゴンシリョのボニファシオ伝の内容について十分な情報を得ないまま、その出版に異を唱えたという(ibid.: 58; Ocampo 1995: 45, 81; Iletto 2011: 509; Iletto 2017: 214-215)⁸。

さらに1950年代にはカトリック教会がアゴンシリョのボニファシオ伝のなかの同教会の扱いについて強く反対したため、当時のマグサイサイ大統領が再度出版を取りやめる措置を講じた。しかし、この大統領の決断に対してナショナリストとして知られたクラロ・M・レクト上院議員が動いた結果、マグサイサイ大統領は事態打開のための委員会を立ち上げ、1956年2月に閣議が開催され、アゴンシリョのボニファシオ伝の刊行がようやく正式に認可された。しかし『大衆の反乱』は、その出版と相前後して、それまでフィリピン歴史学界で影響力を行使してきた学者たちから強烈的な批判を浴びることになる。その中心的な役割を果たしたのが、当時、国立フィリピン大学歴史学科長を務めていたニコラス・ザフラであり、ザフラとアゴンシリョの間でさまざまな論戦が展開された(ibid.: 58-78)。

その論戦を振り返り、アゴンシリョは1956年3月に『大衆の反乱』の第2版用に準備した序文(未刊行)で、多くの批判にもかかわらず本書の見解を変更する意思のないことを次のように語っている。

1947年末から1948年1月にかけて本書を執筆して以来、私が収集してきた大量の記録をもってしても、1896年革命は、ボニファシオという一般庶民層(plebian)出身の大衆向け指導者が計画した「大衆の反乱」だったとの私の主張を覆すような事実には、いまだひとつとして遭遇したことはない。それは大衆が参加し、大衆によって遂行された。第2に、本書は、イラストラードや富裕層によって構成される中産階級は、革命に参加せず、自由のみならず独立を勝ち取るという困難な任務において大衆を支援しなかったという意味で、革命を裏切る罪を犯したことを明らかにした。こうした私の見解を非難する人々は、この二つの私の主張が間違いであることを証明する具体的な証拠を何も提示してこなかった。1896年革命は、ピオ・バレンスエラ博士やエミリオ・ハシントのようなごく少数のイラストラードが参加したものの、本質的に一般庶民層によるものだった(ibid.: 79)⁹。

『大衆の反乱』についてのこうした見解をアゴンシリョは生涯貫いた。それは、アンベス・R・オカンボが1984年に編集したアゴンシリョとの長時間の貴重なインタビューからも知ることができる

(Ocampo 1995/2011)。また、アゴンシリョによって一般庶民層、あるいは大衆として描かれてきたボニファシオ像をよりダイナミックかつ豊かに把握するための試みが、1970年代後半ころからみられるようになった。その先鞭をつけたのが、フィリピン人の著名な小説家のニック・ホアキンやイギリス人フィリピン研究者のジョナサン・ファーストとジム・リチャードソンのエッセイである (Hila 2001: 80-81; Joaquin 1977: 75-119; Fast and Richardson 1979: Chap. 9)。

さらに1990年代半ばになると、アメリカ人の歴史学者グレン・A・メイがアゴンシリョのフィリピン革命史像に真っ向から挑戦を挑んだ。メイはアゴンシリョが『大衆の反乱』でボニファシオ像を描くにあたって使用した史料やインタビュー記録の信憑性には問題があり、それらが信頼に足るものでないとする、アゴンシリョが描いたボニファシオ像は捏造されたことになる、と主張したため、多くのフィリピン人歴史学者が一斉に反発し大論争となった (Hila 2001: 84-92; May 1996/1997 Chap. 4; Churchill 1997; 永野 2000: 34-36)。

この論争に史料考証の観点から一定の着地点を提示した労作が、ジム・リチャードソンによる『自由の光』(Richardson 2013)である。本書は、秘密結社カティプーナンのに関する未刊行文書を含む膨大な史料(タガログ語)のほとんどを英語に翻訳したうえ、各史料について注釈を加えて、秘密結社カティプーナンの活動を克明に追跡したものである。本書の最も大きな功績は、1996~98年のグレン・メイとフィリピン人歴史学者たちとの間の論争において決着がつかなかった史料の信憑性の問題に対して、明確な回答を与えたことにある。『自由の光』は、グレン・メイによってその信憑性に疑義が提示された史料について丁寧な考証をおこない、その真偽性にまったく問題がない、との結論を示したからである。その一方で、リチャードソンは、結社カティプーナンの「コロルム」と呼ばれる民衆の自然発生的な蜂起形態をもつ伝統的組織ではなく、むしろ、ひとつの民族としてのまとまりをめざした開明的組織であった点を強調し、アゴンシリョ以来フィリピン人歴史家たちによって展開されてきた「民衆史としてのフィリピン革命論」に異議を唱えるのである (永野 2020: 132-134)。

事実、1996~98年のフィリピン革命百周年記念を経るなかで、1960年代以降に定着した「未完の革命論」とは異なるパラダイムでフィリピン革命を捉えようとする論考や著書が数を増していった。たとえばアメリカで活躍するフィリピン人の歴史家ビセンテ・L・ラファエルは、ミラグロス・C・ゲレーロ著『ルソン島における戦争』への序文のなかで、近年のジム・リチャードソンの議論に賛同し、フィリピン革命の火蓋を切ったアンドレス・ボニファシオは、一般大衆ではなく中間層であるという議論を支持し、フィリピン革命は、結社カティプーナンの蜂起からマロロス共和国の創設まで、一貫してエリート層が主導していたとの見解を提示する。そして、アゴンシリョはフィリピン革命とそれに続くフィリピン・アメリカ戦争の時代を、革命の第1段階としての「大衆の反乱」期(1896~98)と第2段階としての「マロロス共和国の成立と崩壊の時期」(1898~1902)に区分し、前者を「革命的」な時代、後者を「反革命的」な時代として対比して捉えていることは、きわめて不適切であると主張する (Rafael 2015: Introduction)¹⁰。

他方、フィリピン研究の優れた学術雑誌として定評のある雑誌『フィリピン・スタディーズ』編集長を長らく務めてきたフィロメノ・V・アギラル・ジュニアは近年発表した論考で、『大衆の反乱』によって革命の主導者と位置づけられた「大衆」という用語には、「肯定的意味」より「否定的意味」を込めている事例の方がはるかに多いことに着目する。そしてアゴンシリョが、革命の主体として「大衆」に共感しながらも、学識者としての目線で「大衆」の「無知」、「騙され易さ」、「衝動的」、「非合理」、「欺瞞」を表現していたと指摘する (Aguilar 2020)。

こうした近年におけるフィリピン革命史のアプローチの変化は、大局的にみると、長らくフィリピン独立革命の主たる担い手として位置づけられてきた一般民衆像に再検討を加えながら、社会の中間層もしくはエリート層に焦点をあてて、フィリピン革命を政治的現象とだけではなく、その社会・文化的側面に関心向けつつ、多角的な観点から革命のダイナミズムへ接近しようとする試みとしてみることができよう。次節では、本節で紹介した『大衆の反乱』をめぐる論争と批判的検討を踏まえて、その歴史叙述の特徴に触れることにしたい。

3 『大衆の反乱』の歴史叙述

『大衆の反乱』は400頁を超える大書である。初版は1956年に国立フィリピン大学文学部から刊行され、その後、長らく絶版となっていたが、1996～98年のフィリピン革命百周年記念事業として、1996年に国立フィリピン大学出版会から復刻された。復刻版は初版と頁数が異なるが、筆者の手元には初版がないので、本節では、本書の内容を紹介するにあたって1996年の復刻版を使用することにした。なお、本書については、1964年に発表された池端雪浦による書評があり、各章の内容についてすでに詳しい説明がなされているので（池端1964）、本節では、本書におけるアゴンシリョの歴史家として姿勢をまず明らかにし、ついでその全体的な構成と各章が扱った主要テーマの特徴を検討する。

アゴンシリョは1948年4月付の本書の序文で、その執筆方法とその意義を次のように記している。本書の特徴を理解するうえで重要なので、以下、その内容を要約しよう。

『大衆の反乱』は、アンドレス・ボニファシオの伝記であるが、さまざまな困難のなかで本書を執筆する決意をしたのは、秘密結社カティプーナとその創立にあたっての中心的メンバーのボニファシオの歴史について入手可能な史料を渉猟してフィリピン革命の初期の歴史が記述されることがなかったからである。実際に、ボニファシオの人生について完璧な叙述をおこなうのは、次の二つの理由から不可能である。第1に、まずボニファシオがマニラの一般庶民層の出身で、だれも彼が全国的に名を知られるような人物になるとは思っていなかったため、彼の身内でさえ正確な情報を提供することができなかったこと。第2には、結社カティプーナは、1897年5月に深刻な内部対立を起こし、この結果ボニファシオが処刑されるという悲劇が起きた。その際の革命組織内の軍事裁判とボニファシオ兄弟の粛清については、むしろ膨大な史料や記述が残されている。それ故に、事実をゆがめた情報が数多く生み出され、それが既成事実化するという混乱が生じるようになった。

こうした状況のなかで、アゴンシリョはボニファシオと結社カティプーナについて同書をまとめるにあたり、ボニファシオの個人史ではなく、結社カティプーナに焦点をあてることにしたという。なぜなら、ボニファシオは、カティプーナという革命組織を通して、最もよく理解できる人物と考えられるからである。依拠した史料の扱いには最新の注意を払った。例えば、カティプーナの主要メンバーのアルテミオ・リカルテの備忘録やエピファニオ・デ・ロス・サントスやテオドロ・M・カラウなど、その内容は従来疑問の余地のないものと考えられていたが、慎重な史料考証の結果、事実と誤りがあることがわかった。このため、こうした事実確認についての議論はすべて本書の末尾の注でおこない、本文では、アゴンシリョがたどりついた結論だけを示すという手法を採用している（Agoncillo 1996: vii-ix）。

さらに本書の参考文献リストに目を通すと、一次資料と二次資料に分類されている。しかし、アゴンシリョは同リストのまえがきとして、資料として利用した文献は一般読者が入手できない多くの記録文書の全文を掲載しているもので、その意味ではすべて一次資料と呼ぶべきものだとする。そして本書をまとめるにあたって最も重要なデータを提供したのは、エミリオ・アギナルドだったとする。アギナルドはアゴンシリョの予想に反して、本書の執筆に必要となる話を親切にしてくれたという。このため、アギナルドへの謝辞は、前述の序文の末尾にも添えられている。その他、結社カティプーナで実際に活動した数人のメンバーとも積極的にインタビューをおこなっている（ibid: ix, 363）。

かくしてアゴンシリョは入手できうる限りの資料と存命中のカティプーナの主要メンバーからの聞き取り調査をとおして、ボニファシオが活躍した結社カティプーナの動静とボニファシオ自身の活動を立体的にとらえ、圧倒的な臨場感を読者に伝えるべく、それぞれの場面における歴史的展開を再構成していった。その叙述手法によって、ボニファシオの身体的活動を描写するだけでなく、その微妙な心の動きをも捉えることになる。同書のそれぞれの章は、あたかもひとつの演劇のなかの各ステージの場面のように設定され、そのなかで登場人物の語りをとおして刻々と変化する情勢を描いている。『大衆の反乱』は、まぎれもない歴史書なのであるが、読み物としては歴史小説としてのかたちを成しているといつてよい。

アゴンシリョは歴史家になるまえにタガログ語や文学をむしろ専門としていたとの経歴が示すように、その多彩な能力が本書で余すところなく発揮されている。本書の書名が『大衆の反乱：ボニファシオとカティプーナンの物語（Story）』とされ、『大衆の反乱：ボニファシオとカティプーナンの歴史（History）』とされなかったのは、こうした特異な歴史叙述の手法を反映しているように思われる。本書は、初版の刊行以来すでに65年を経過し、多くの批判を受けながらも、今日にいたるまでフィリピン革命史の古典的名著としてのゆるぎない地位を維持している理由は、アギナルドを中心として実際にカティプーナンで活動した人々からの聞き取り調査から得た具体的情報のみならず、そこで活動していた人々のさまざまな感情をアゴンシリョが直接的に汲み取る時代に生きた歴史家であったことによるものでもあろう。

ここで『大衆の反乱』の章別構成の特徴について議論するまえに、本書でアゴンシリョが扱ったフィリピン革命初期の歴史展開、すなわち、1892年7月の結社カティプーナンの誕生前夜から1897年5月のボニファシオ粛清事件までの歴史的経過を素描すると、以下のとおりである。

1880年代にスペインで展開された啓蒙改革運動を率いたホセ・リサルが1892年6月にフィリピンに帰国し、翌7月にフィリピン人としての民族思想の実践をめざして「フィリピン民族同盟」を結成した。ところが、リサルはその直後に反逆罪で逮捕され、ミンダナオ島のダピタンへ流刑された。「同盟」に参加していたアンドレス・ボニファシオは、その直後に数人の仲間たちとともに秘密結社カティプーナンを組織した。その後カティプーナンはマニラで勢力の拡大をはかり、対スペイン独立への道を模索していった。そして遂に1896年8月に武装蜂起し、独立革命の火蓋が切って落とされた。

他方、スペイン軍は本国からの援軍を得て猛反撃を展開し始めたため、ボニファシオらの革命組織は苦戦を強いられていった。そうしたなかで、マニラ周辺諸州のひとつのカビテ州ではエミリオ・アギナルドらが革命組織を率いていた。この結果、ボニファシオとアギナルドとの間で革命組織の主導権をめぐる争いが激化し、1897年5月にボニファシオがアギナルド勢力によって処刑されるという悲劇が起きた。こうして、ボニファシオはフィリピン革命の舞台から姿を消すことになったのである。

以上のような歴史的展開を語るために、『大衆の反乱』ではつぎの16章が構成された。すなわち、「第1章 フィリピンを覆う夜」、「第2章 覚醒」、「第3章 過激なナショナリズム1」、「第4章 過激なナショナリズム2」、「第5章 杖と扇子」、「第6章 書き言葉の力」、「第7章 裏切り」、「第8章 ダピタンの幕間」、「第9章 自由の鐘を鳴らせ」、「第10章 血と涙をとおして」、「第11章 マグダロの登場」、「第12章 不満の種」、「第13章 陰謀と扇動」、「第14章 法治と人治」、「第15章 背後からの銃弾」、そして「第16章 要約」である。

最終章の第16章は本書のまとめなので、実際の歴史叙述は15章で構成されている。そしてこの15章は、扱っている内容から、第1～4章、第5～10章、そして第11～15章の3つの部分に分けることができる。第1の部分、すなわち第1～4章は1896年のフィリピン革命勃発の背景を、第2の部分、すなわち第5～10章はボニファシオの登場とカティプーナンの蜂起を、そして第3の部分、すなわち第11～15章はアギナルド登場後のカティプーナンの内部抗争を扱っている。

これを演劇に喩えれば、「第1幕 革命前夜」、「第2幕 ボニファシオの登場」、そして「第3幕 ボニファシオの没落」となるだろうか。そして、3幕に分けられた各章の内容を演劇のそれぞれの幕のなかの話題として表現すると、次のようになろう。「第1話 プロバガンダ運動開始前のフィリピン」、「第2話 プロバガンダスペインでの啓蒙改革運動」、「第3話 プロバガンダフィリピンでの啓蒙改革運動」、「第4話 結社カティプーナンの誕生」、「第5章 ボニファシオの人物像」、「第6章 活動するカティプーナン」、「第7章 プロバガンダ啓蒙改革運動の限界」、「第8章 ダピタンのリサル」、「第9章 カティプーナンの武装蜂起」、「第10章 スペイン軍による弾圧」、「第11章 アギナルドの登場」、「第12章 カティプーナンの内部対立」、「第13章 テヘロス会議」、「第14章 ボニファシオの逮捕」、「第15章 ボニファシオの処刑」。そして、最後の第16章では、演劇全体を振り返りながら、幕が下りることになる。

このようにひとつの演劇に喩えて本書をみた場合、アゴンシリョが同書のなかで頻繁に使用した「大衆」という用語についての見方も変わってくるのではないだろうか。アゴンシリョは、「大衆」という

用語をどのように定義するのかについて明言することはない。別言すれば、アゴンシリョのもつ「大衆」のイメージとは何か、単に一般住民を指すのか、より具体的には、都市労働者なのか、あるいは農村地域の農民一般を指すものなのか、アゴンシリョ自身がその具体的なイメージを語ることはない。そうしたなかで同書を通読して筆者が感じ取ったことは、アゴンシリョが「大衆」という用語のなかに込めた意味とは、フィリピン革命当時、一般住民の間に広がった植民地支配に対する不満、不公平感、やるせなさ、あるいは憤りから生み出された力であった。それゆえに、アゴンシリョは明確な定義をすることなく、半ば自明のものとして多くのフィリピンの人々の間で共感され受け継がれてきた感情を込めて使用した用語が「大衆」であったように思われる。

アゴンシリョの弟子であり、フィリピン革命史家として知られるミラグロス・ゲレーロがその学位論文でいみじくも指摘したように、アメリカ植民地期にアメリカ人研究者たちによってフィリピン革命史が描かれた。しかし、彼らは一様に、革命はスペイン支配に対する広範な抵抗によってもたらされたが、それはフィリピン人エリートの自発力と指導力によるものだった。そうした見解においては、民衆や「教養のない」反乱の指導者たちの役割が軽視され、有産知識階層などのエリート層のナショナリズムの発展やフィリピン革命の勃発とその後とフィリピン・アメリカ戦争の展開における彼らの役割により多くの関心が向けられてしまうのである（Gurrero 1977: 2-9; 永野 2018: 165-166）。

こうしたアメリカ人研究者たちの見解に対抗して、アゴンシリョが『大衆の反乱』で主張したことは、フィリピン革命は少数のエリート層の指導力によるものだけではなく、低所得者層の人々の間に長らく蓄えられてきた植民地支配に対する抵抗のエネルギーをその基礎としており、それを文字通り体現していたのがボニファシオの率いた結社カティブーナだったという点にある。この意味で、アゴンシリョは、池端雪浦がその書評で評価したように、フィリピン歴史学界においてはじめて「フィリピン国民によるフィリピン史の再構成」の課題を実践した歴史学者として位置づけることができる（池端 1964: 114）。

むすび

本小稿は、まずアゴンシリョの略歴をたどり、ついで『大衆の反乱』をめぐる幾多の論争を踏まえて、本書の歴史叙述の特徴について若干の検討をおこなった。本小稿では、アゴンシリョが同書をまとめるにあたって、既存の史料のみならず、アギナルドを含め実際にカティブーナに参加し、ボニファシオ自身とさまざまなかたちで交流した人々との聞き取り調査をおこなったことにとくに注目した。こうした聞き取り調査によって、アゴンシリョはフィリピン革命を生きた同時代の人々の感性を汲み取り、革命という一連の出来事が展開するなかで日常を送っていた多くの人々がそうした出来事にどのように向き合っていたのかに対する理解を深めていったように思われる。歴史家としてのフィリピン革命に対するそうした向き合い方は、この革命が一貫してエリート層によって主導されたという見解では語りきることはできない、というアゴンシリョの確信にも近い結論をもたらしたように筆者には思えてならない。

ところで、今から10年ほど前のことになるが、2012年11月にアゴンシリョ生誕100年を迎えた。これを記念して、フィリピンの著名な歴史家でありコラムニストのアンベス・R・オカンポは、生前のアゴンシリョの言葉のいくつかを引用しながら、歴史家としてのアゴンシリョの立ち位置について述懐している。そのいくつかを紹介して、本小稿を終えることにしたい。

アゴンシリョは語る、「歴史を書いているとき、可能であれば現在のことを忘れなければなりません。書いている時代に生きようと心がけるべきです」、「偏った見解をもたない歴史があるでしょうか。偏った見解をもたない歴史家、つまり本当の歴史家がいるのなら、教えてください。歴史とは決して客観的なものではありません」、「歴史はあらゆる世代によって書かれるべきものです。同じ資料を使いながら、あらゆる世代がそれぞれの固有の歴史を書くのです。その解釈は時代ごとに異なってくるのです」（Ocampo 2012）、と。

フィリピン独立直後から1980年代初頭まで優れた著作を精力的に書き続けた歴史家アゴンシリョが

あとに続く若い世代に託した、謙虚な言葉として受け取ることができよう。

注

- 1 日本における代表的フィリピン革命史研究として、池端（1987）を参照。
- 2 『大衆の反乱』刊行以前にフィリピン革命を扱った英語の著書として一般的評価を得ていたものに、Kalaw（1925）がある。
- 3 レナト・コンスタンティーノの歴史研究については、永野（2013）を参照。
- 4 近年、『大衆の反乱』やその他のアゴンシリョの著作など関するフィリピン人研究者たちによる主な論考や著作として次の6点を挙げておく。① Ocampo（1995/2011）は、1984年におけるアゴンシリョとの長時間の貴重なインタビューを収録したもの。付録として1976年の雑誌『ソリダリダード』に掲載されたインタビューも再録している。② Hila（2001）は、アゴンシリョの歴史叙述の特徴を議論しながら、『大衆の反乱』やその他の著作の意義を再確認した好書。とくに『大衆の反乱』については、その刊行以降1990年代後半までの論争の展開を詳述している。③ Churchill（2003）は、歴史家としてのアゴンシリョの多面的側面を髣髴とさせる歴史哲学・文学史・人物伝を収録したエッセイ集。④ Totanes（2010）は、1960年代後半以降、大学におけるフィリピン史の定番教科書となった、アゴンシリョの通史『フィリピン国民の歴史』（Agoncillo and Alfonso 1967; Agoncillo and Guerrero 1970）が版を重ね共著者を変更しながら、同書がたどった歩みを追跡した論考。なお、Totanes（2012: Chap. 4）では、アゴンシリョの履歴と『大衆の反乱』についての論争を取り上げている。⑤ Iletto（2011）とIletto（2017: Chap. 8）は、1940年代後半から1950年代の冷戦期において激動するフィリピンの政治情勢を克明に分析し、そうした政治情勢が『大衆の反乱』の問題設定とどのように関連していたのかを追求したエッセイ。⑥ Aguilar（2020）は、『大衆の反乱』における「大衆」(masses)についての用語の使用方法を丹念に分析し、アゴンシリョの大衆に対する否定的イメージを析出し、その歴史家としての限界について検討した論文。
- 5 レアンドロ・フェルナンデスは、コロンビア大学でフィリピン革命史をテーマに博士論文を執筆し（Fernandez 1926）、フィリピン人としてアメリカの大学から初めて博士号を取得した歴史学者である（May 1997: 174）。
- 6 アゴンシリョ教授は、国立フィリピン大学定年退官後、1978年に東京の国際基督教大学の客員教授として来日し、フィリピン史の講義を担当した。筆者は1977～78年に国立フィリピン大学に留学していたが、運よく帰国後に同教授の講義を聴講する機会に恵まれた。
- 7 この点について詳しくは、Iletto（2011: 501-506）をみよ。
- 8 しかし、1955年ころには、アギナルドもアゴンシリョのボニファシオ伝の刊行を歓迎するようになっていたというIletto（2011: 512; 2017: 219）。なお、アギナルドは1869年3月生れで、1964年2月に94歳で物故した。日本人によるアギナルド伝として、渡辺（2009）を参照。
- 9 ヒラの著書からの重引にもとづく邦訳である。
- 10 詳しくは、永野（2018）をみよ。

参考文献

- Agoncillo, Teodoro A. (1956/1996) *The Revolt of the Masses: The Story of Bonifacio and the Katipunan*, Quezon City: University of the Philippine Press.
- Agoncillo, Teodoro A. (1960/1997) *Malolos: The Crisis of the Republic*, Quezon City: University of the Philippines Press.
- Agoncillo, Teodoro A. and Oscar M. Alfonso (1967) *History of the Filipino People* 2nd ed., Quezon City: Malaya Books.
- Agoncillo, Teodoro A. (1965) *Fateful Years: Japan's Adventure in the Philippines, 1941-1945*, 2 vols. Quezon City: R. P. Garcia Publishing Co. (第1巻の前半部の邦訳、テオドロ・A・アゴンシリョ著、二村健訳『運命の歳月 第1巻』井村文化事業社、1991年)。
- Agoncillo Teodoro A. (1969) *A Short History of Filipino People*, New York and Toronto: The New American Library (テオドロ・アゴンシリョ著、岩崎玄訳『フィリピン史物語: 政治・社会・文化小史』井村文化事業社、1977年)。
- Agoncillo, Teodoro A. and Milagros C. Guerrero (1970) *History of the Filipino People* 3rd ed., Quezon City: Malaya Books and R.P. Garcia Publishing.

- Agoncillo Teodoro A. (1984) *Burden of Proof: The Vargas-Laurel Collaboration Case*, Mandaluyong, Metro Manila: University of the Philippine Press for the U.P.-Jorge B. Vargas Filipiniana Research Center.
- “Agoncillo, Teodoro A. (1912–1985)” (1993) IN *Philippine Encyclopedia of Social Sciences, Vol. II*, Quezon City: Philippine Social Science Council.
- Aguilar, Filomeno V., Jr. (2020) “What Made the Masses Revolutionary?: Ignorance, Character, and Class in Teodoro Agoncillo’s *The Revolt of the Masses*,” *Philippine Studies*, vol. 68, no. 2.
- Churchill, Bernardita Reyes ed. (1997) *Determining the Truth: The Story of Andres Bonifacio*, Manila: Manila Studies Association; Quezon City: Philippine National Historical Society.
- Churchill, Bernardita Reyes ed. (2003) *History and Culture, Language and Literature: Selected Essays of Teodoro A. Agoncillo*, Manila: University of Santo Tomas Publishing House.
- Constantino, Renato (1975) *The Philippines: A Past Revisited*, Quezon City: Tala Publishing Services (レナト・コンスタンティーノ著、池端雪浦・永野善子、鶴見良行ほか訳『フィリピン民衆の歴史Ⅰ：往時再訪（１）（２）』井村文化事業社、1978年）。
- Constantino, Renato, and Letizia R. Constantino (1978) *The Philippines: The Continuing Past*, Quezon City: Foundation for Nationalist Studies (レナト・コンスタンティーノ、レティシア・R・コンスタンティーノ著、鶴見良行ほか訳『フィリピン民衆の歴史Ⅲ、Ⅳ：ひきつづく過去（１）、（２）』井村文化事業社、1979、1980年）。
- Fast, Jonathan, and Jim Richardson (1979) *Roots of Dependency: Political and Economic Revolution in 19th Century Philippines*, Quezon City: Foundation for Nationalist Studies.
- “Felipe F. Agoncillo” (1989) IN *Filipinos in History Volume I*, Manila: National Historical Institute.
- Fernandez, Leandro H. (1926) *The Philippine Republic*, New York: Columbia University.
- Guerrero, Milagros Camayon (1977) “Luzon at War: Contradictions in Philippine Society, 1898–1902,” PhD Thesis, University of Michigan.
- Hila, Antonio C. (2001) *The Historicism of Teodoro Agoncillo*, Manila: University of Santo Tomas Publishing House.
- Ileto, Reynaldo C. (2011) “Reflections on Agoncillo’s *The Revolt of the Masses* and The Politics of History” 『東南アジア研究』第49巻第3号。
- Ileto, Reynaldo C. (1979/1989) *Pasyon and Revolution: Popular Movements in the Philippines, 1840–1910*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press (レイナルド・C・イレート著、清水展・永野善子監修、川田牧人・宮脇聡史・高野邦夫訳『キリスト受難詩と革命：1840～1910年のフィリピン民衆運動』法政大学出版局、2005年）。
- Ileto, Reynaldo C. (2017) *Knowledge and Pacification: On the U.S. Conquest and the Writing of Philippine History*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Joaquin, Nick (1977) *A Question of Heroes: Essays in Criticism on Ten Key Figures of Philippine History*, Makati, Metro Manila: Ayala Museum (Reprint 2005: Pasig City: Anvil Publishing).
- Kalaw, Teodoro M. (1925) *The Philippine Revolution*, Manila: Manila Book (Reprint 1969: Mandaluyong, Rizal: Jorge B. Vargas Filipiniana Foundation).
- “Marcela M. Agoncillo” (1989) IN *Filipinos in History Volume I*, Manila: National Historical Institute.
- May, Glenn Anthony (1996/1997) *Inventing a Hero: The Posthumous Re-Creation of Andres Bonifacio*, Madison: Center for Southeast Asian Studies, University of Wisconsin and Quezon City: New Day Publishers.
- Ocampo, Ambeth R. (1995/2011) *Taking History: Conversations with Teodoro Andal Agoncillo*, Manila: De La Salle University/Manila: University of Santo Tomas Publishing House.
- Ocampo, Ambeth R. (2012) “Teodoro A. Agoncillo@100” *Philippine Daily Inquirer* (Nov. 8) <https://opinion.inquirer.net/40386/teodoro-a-agoncillo100> (2021年12月1日閲覧)。
- Rafael, Vicente L. (2015) “Introduction: Revolutionary Contradiction,” IN *Luzon at War: Contradictions in Philippine Society, 1898–1902* by Milagros Camayon Guerrero, Mandaluyong City: Anvil Publishing.
- Richardson, Jim (2013) *The Light of Liberty: Documents and Studies on the Katipunan, 1892–1897*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- “Teodoro Agoncillo” (1996) IN *Filipinos in History Volume III*, Manila: National Historical Institute.
- Totanes, Vernon R. (2010) “History of the Filipino People and Martial Law: A Forgotten Chapter in the History of a History Book, 1960–2010,” *Philippine Studies*, vol. 58, no. 3.
- Totanes, Vernon R. (2012) “History of the Filipino History Book,” PhD diss. Faculty of Information, University of

Toronto.

池端雪浦（1964）「書評：テオドロ・A・アゴンシリョ著『民衆の反乱：ボニファッショとカティプナンの物語』」『東洋學報』第47巻第1号。

池端雪浦（1987）『フィリピン革命とカトリシズム』勁草書房。

永野善子（2000）『歴史と英雄：フィリピン革命百年とポストコロニアル』（神奈川大学評論ブックレット11）御茶の水書房。

永野善子（2013）「抵抗の歴史としての反米ナショナリズム：レナト・コンスタンティーノを読む」、永野善子編著『植民地近代性の国際比較：アジア・アフリカ・ラテンアメリカの歴史経験』御茶の水書房。

永野善子（2018）「フィリピン革命史再訪：近年のフィリピンにおける研究潮流を背景として」、永野善子編著『帝国とナショナリズムの言説空間：国際比較と相互連携』御茶の水書房。

永野善子（2020）「グローバル化時代のフィリピン革命史研究：近年の欧米研究者たちの動向」『神奈川大学アジア・レビュー』第7号。

渡辺孝夫（2009）『フィリピン独立の祖：アギナルド将軍の苦闘』福村出版。